

2023年6月4日 主日礼拝

説教題「イエスは主なり」 コリントの信徒への手紙一 12章3～7節

主任牧師 加藤 誠

「神の霊によって語る人は、だれも、『イエスは呪われよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」(第一コリント12章3節)

使徒パウロはコリント教会の人びとに「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えない」と語りかけました。「イエスは主なり」という告白が「聖霊の働きによる」とはどういうことなのでしょう。

ペンテコステの日、ペトロたちは「イエスこそ主である／世界中の私たちの救い主である」という告白をエルサレムに集まってきていた世界中の人々に向けて語り始めました。このとき「イエス・キリストの教会」は誕生したのです。けれども一つ素朴な疑問があります。ペトロたちはその前から主イエスに従ってきていたはずなのに、なぜその時には「キリストの教会」になりえなかったのか。そして十字架の時でも復活の直後でもなく、なぜイースターから 50 日目、ペンテコステの時を待たなければ「キリストの教会」は誕生しなかったのか…という疑問です。

福音書を読むとたびたびペトロが「イエスは主なり」と告白した場面が紹介されています。例えばマタイ福音書 16 章で主イエスが「あなたがたは、わたしを何者だと言うのか」と尋ねた時、ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。またヨハネ福音書 6 章で主イエスが「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物である」と語るのを聞いて多くの弟子たちが離れていった時、ペトロは「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者です」と応えています。

しかしながら、この時点ではまだペトロたちの告白は「キリスト教会の信仰告白」にはなりえていませんでした。そこには決定的なものが欠けていたからです。それは「十字架」です。「主イエスの十字架と自分との関係」です。ペトロは「イエスこそ世界のすべての人々のために神の愛をあらわす救い主として来てくださった！」と理解していましたが、「この自分の罪のためにこそ、主イエスは来てくださった。この情けないほどに弱く、自己中心の罪から抜け出せない、みじめなわたしのためにこそ主イエスは十字架にかかれた！」という点がまだ理解できていませんでした。イエスの「栄光」（すばらしさ）は見えていたけれど、イエスの「十字架の苦難」の意味が分かっていなかったのです。

しかし十字架を通してペトロは、自分が持っていると思っていた「信仰」を粉々に砕かれ、「主イエスの十字架はこの自分の罪を贖い、新しい命に生かして下さるためだった！」という「十字架の恵み」を聖霊によって知らされた時に、ペトロの「イエスは主である」という告白は「キリストの教会の告白」に変えられて、教会が誕生したのでした。つまり、聖霊がわたしたちに与える主告白は「十字架の主こそ我らの主なり」という告白です。その「十字架の主とわたしの関係」が見えて

いないと「キリストの教会にならない」のです。なぜなら「十字架の主はわたしの罪のためであること」を見過ごしにしている時、私たちの信仰は主を告白している、自己中心の信仰になっているからです。ペトロが十字架を前にして「わたしは他の弟子とは違います。わたしは最後まであなたから離れません」と自分を誇っている時には、ペトロの信仰告白は「教会の信仰告白」になりえませんでした。そうではなく、私たちの信仰、自分の力が砕かれて、「ただ十字架の主の恵みによってのみ、わたしは立つことが出来ます」という、聖霊の恵みの信仰に立てられる時、はじめて私たちの主告白は「教会を共に建てる信仰告白」となるのです。

先日 83 歳で天に召された小岩正子さんは 39 歳で「イエスは主なり」という告白に導かれましたが、信仰告白の中でこのようなことを語っておられます。カトリック系の大学に入学して聖書を知った。そしてクリスチャンの夫と結婚して信仰を知った。けれども自分には関係のないことだと思っていた。そんな自分にあげぼの幼稚園に入園した息子が神への畏れをはっきり教えてくれた…と。「息子の言葉が私の胸に突き刺さりました。ある夏の礼拝で、私は御説教を聴いている中に自分の傲慢さ罪深さを思い知らされ突然身体がガタガタ震えてしまいました。全く予想もしていませんでした。神様の前にあっては意地も見栄も捨て素直になれる私を発見しました」と。このとき、小岩さんは自分の力ではなく、聖霊の働きによって「十字架の主と自分の罪との関係」を示されたのでした。

先週のペンテコステ礼拝では 10 人の方たちによる「証しのリレー」がありました。お一人お一人が聖霊の働きに触れた経験を御自分の言葉で語ってくださるのを聴きながら、聖霊の働きの多様さとお一人おひとりの聖霊を感じる感性の多様さに感嘆すると共に、これだけ多様な私たちを「イエスは主なり」という告白において「一つ」としてくださっている神さまの働きの「すごさ、深み」に感嘆させられました。今朝のコリント教会宛の手紙の中で使徒パウロは「だれも聖霊によらなければ『イエスは主である』とは言えない」という言葉に続いて、「賜物や務め、働きはいろいろありますが、それを与えるのは同じ霊であり、同じ主であり、同じ神です。一人ひとりに“霊”の働きが現れるのは全体の益となるためです」と語っています。キリストの教会を形づくっている私たちは、これだけ多様だけれども、「イエスは主なり」という告白、つまり「十字架のイエス・キリストこそ、わたしの主であり、世界のすべての人の主です。十字架の主によって、わたしの罪は贖われ、神さまの新しい命に生かされます！」という告白において「一つ」とされるのです。キリストの教会に、主が招かれる一人ひとりほんとうに多様だし、その賜物も務めも働きも多様だけれども、それは「キリストの教会を形づくり、教会の働きを豊かに担うための多様さ」なのです。

大井教会に招かれ「一つ」とされている私たちもそうです。多様なだけに、なかなか分かりえない時もあり、ぶつかる時もある。けれども同じ聖霊によって「イエスは主なり」という告白に導かれ、「一つ」として組み合わせられている不思議と喜びを共に賛美していきたいのです。